



CENTER NEWS

SEPTEMBER 2015

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



マーストリヒト大学（左下）、オランダ・ベルギーの歴史的建造物と絵画

Contents

- | | |
|--|--|
| ● トーマス・ジェファーソン大学訪問とその後の学生実習の受入 2
教授 北村 聖 | ● 東京大学医学教育セミナー 2015 年春・夏の実績 5
講師 大西 弘高 |
| ● アジア太平洋医学雑誌編集者会議 2
教授 北村 聖 | ● 臨床診断学実習・模擬患者つづきの会 5
講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝 |
| ● WONCA アジア太平洋地域学術大会 2015 3
講師 大西 弘高・講師 孫 大輔 | ● 医学系研究科での開講状況について 6
講師 大西 弘高 |
| ● マーストリヒト大学大学院医療者教育学修士課程 2 年目 3
講師 孫 大輔 | ● 駒場での初年次ゼミナール 6
教授 北村 聖・講師 孫 大輔 |
| ● ラオス保健省高官への講義 3
講師 大西 弘高 | ● 新外国人特任教員 Dr. Srinivasan の紹介 7
カリフォルニア大学デービス校医学部准教授 Malathi Srinivasan, MD, FACP |
| ● 東京大学医学部教育総合的改革 FD（第 1 回） 4
講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝 | ● 日本医学教育学会大会出席報告 7
講師 大西 弘高・講師 孫 大輔 |
| ● 東京大学医学教育基礎コース 2015 4
博士課程大学院生 山本 健・講師 孫 大輔 | ● センター日誌／編集後記 8 |

トーマス・ジェファソン大学訪問とその後の学生実習の受入

教授 北村 聖

6月29日から7月3日まで米国ペンシルバニア州フィラデルフィアのトーマス・ジェファソン大学医学部を訪問した。昨年12月に続いての訪問である。昨年訪問した際に、米国医学教育学界の重鎮であるジョセフ・ゴネラ教授と医学教育、特にプロフェッショナリズムの教育について親しく教を請うことができた。またその後、来日された際も東京で日米の医学教育の違いについて議論することができた。これらの交流を踏まえて、今回、トーマス・ジェファソン大学医学教育研究センターの客員教授に任命され、その辞令を受け取りに訪問した（写真1）。

実際は、辞令交付のみならず、大学の医学教育の専門家からそれぞれ1時間以上の講義をしていただき、その後そのトピックスに関して議論することができた。とくに、学部長からは来年度のカリキュラム改革の詳細について説明いただき、米国でも教育熱心で知られるこの大学の新しい方向性を見ることができたことは、得難い情報と経験であった。また、ホジヤト教授からプロフェッショナリズムとは違った、Empathy の教育と測定について丁寧な説明があった。共感と訳されることが多いが、「患者の苦痛に共感することのできる医療者」を育成することが、この大学のミッションの一つであり、極めて重要な話を聞くことができた。

この件に関して、米国財団法人野口医学研究所に多大なるご支援を頂いた。深く感謝申し上げる。



▲（写真1）ゴネラ先生より辞令をいただく

その後、7月6日より、トーマス・ジェファソン大学医学部1年生の中里麻希さんが、日本の医療と医学教育の体験のために来日し、東大医学教育センターならびに東大病院で見学型ではあるが実習をした。中里さんはご両親は日本人であるが本人は米国生まれの米国育ちで、国籍も米国である。日本語は話すことと聞くことは上手であるが、読むことと書くことは苦手である。最初1週間、東大病院血液腫瘍内科で大学病院の診療を見学したのち、7月15-17日に鹿児島県こしきしま 甕島診療所の瀬戸上医師を北村聖とともに訪問し、日本の僻地医療を見学、体験した（写真2）。瀬戸上医師は劇画やドラマになった Dr. コー特診療所のモデルで、30年以上に渡り離島医療を実践してこられた方で、今回、雑誌の取材で予定していた訪問に、中里さんが参加した。本来は一泊二日の予定だったが、台風が接近したため船が欠航し、二泊三日になった。「船が欠航した日こそ、離島医療の醍醐味が味わえる」と瀬戸上医師に言われて、離島の離れ集落の医療を見学、参加した。さらに、折しも独居老人が亡くなっている事故があり、その検死にも参加した。

中里さんは、その後の感想で、日本の医療で一番印象に残ったのは僻地医療で、また、今後はわからないものの、ぜひ総合診療についても積極的に学んでいきたいと話していた。

いままでは、米国の医学教育専門の医師が我々の施設に来て交流を深めていたが、これからは、少し違った形で、自分たちが出かけたなり、向こうの学生を引き受けたりしてより幅の広い交流を目指し、国際研究センターの名に恥じない活動を続けてゆきたい。



▲（写真2）甕島診療所の瀬戸上医師と。右は中里さん。

アジア太平洋医学雑誌編集者会議

教授 北村 聖

2015年8月24-26日にマニラで開かれたアジア太平洋医学雑誌編集者会議に日本医学雑誌編集者会議を代表して参加してきた。この会議は2008年にWHO西太平洋地域事務所（WPRO）の協力で、この地域の医学情報の発信力と信頼性の向上と、医学情報へのアクセスの向上を目指して設立された。総会は毎年この時期に開催されており、昨年はモンゴルで、今年はフィリピンのマニラで開催された。

1日目はこの地域のindex medicus（WPRIM）の会議とAPAMEの各種委員会が開催された。引き続きフィリピンの医学会総会に相当するForum2015との合同の開会式が行われた。2日目からはいくつかのトピックスに分かれてシンポジウムが開かれた。主なものは著者 authorship、査読システム、各種ガイドラインなどである。不正論文のセッションではpredatory journals（ハゲ

タカ雑誌）という新しい概念が紹介された。open publicationに乗じて架空の雑誌やカンファランスを喧伝し、投稿料や参加料をだまし取るというもので、アジア地域でも誘いのメールが多いという。良い雑誌のリストに加えて、ブラックリストも公開されているので注意をするよう警告がなされた。

フィリピンのマニラはWHO西太平洋地域事務所が置かれているところで、いわば本拠地開催で配慮の行き届いた会議であった。来年はタイのバンコクで開催される予定である。東南アジア領域国での開催は初めてであり期待される。



▲ 出席者集合写真

WONCA アジア太平洋地域学術大会 2015

講師 大西 弘高・講師 孫 大輔

さる3月4～8日に台北で開催されたWONCAアジア太平洋地域学術大会に参加した。WONCA（世界家庭医機構）とは、1972年から活動している世界のGeneral Practitioner（家庭医）のための組織であり、世界130国、約50万人が加盟している。

今回、孫は「Difficulties and conflicts junior family physicians face in end-of-life care at home in Japan（若手家庭医が直面する在宅患者の看取りにおける困難や葛藤）」と題した口演発表を行った。内容は、12名の家庭医に対してインタビューを実施しSCAT分析を行ったもので、「患者・家族への予後告知に関する葛藤」「形式的な死亡宣告に対する違和感」「形式知にすることが困難な看取りの作法」などのテーマが語られていた。質問も多く受けこのテーマに対する関心の高さが伺えた。今回、この発表はYoung Investigator Award (Special Recognition)を受賞することができた。翻訳においては客員教授であったMary Lee先生にも多大なご協力を頂いた。日本からも多くの家庭医・総合診療医が参加し、研究発表も多数行っており、今後の我が国におけるこの分野のさらなる発展が期待される。（孫）

大西は、日本プライマリ・ケア連合学会の家庭医療専門医総括評価に用いているポートフォリオ評価について招待講演を行った。ポートフォリオ評価の利点・欠点、ポートフォリオ学習との関連、ポートフォリオを用いた

指導などと共に、ポートフォリオ評価を具体的に進める際のポイントを示すこととなった。経験を振り返りつつ、記載をまとめ直し、練り上げていくことで、妥当性の高い評価になり得る。ルーブリックの作り方、総括評価としての信頼性指標等について初めてわが国の具体的なデータを出すことができたと考えている。特に信頼性指標として、一般化可能性係数が18領域、各領域に評価者2名によって0.84と高い値を示したことで、具体的に利用してみたいと感じた教育関係者も少なくないと思う。

今後、わが国の専門医制度を整備していくプロセスにおいて、このような評価システムの評価については、ますます関心が高まっていくであろう。国際的には心理測定学的解析（psychometric analysis）の専門家が少なからずいるが、わが国では医学教育領域の複雑さと共に解析に明るい専門家が十分育っているとは言えない。今後、認証評価において求められているような信頼性、妥当性の分析ができる専門家育成につなげたいと考えている。（大西）



▲ 学会会場前にて

マーストリヒト大学大学院 医療者教育学修士課程2年目

講師 孫 大輔

オランダにあるマーストリヒト大学大学院にはdistant learningを基本とした医療者教育学の修士コースがあり、世界中から学生が集まっている。筆者は現在このコースを受講中であり、2年目となる今年も5月半ばより3週間、現地スクーリングのため渡欧した。全Unit 11のうち、今回のコースUnit 7は「量的・質的研究法」がテーマで、医学教育学研究に必要な研究法の習得が目的である。まず量的および質的な手法をさまざまに使い分ける医学教育研究では、リサーチパラダイムとして実証主義、ポスト実証主義、構成主義、プラグマティズムなど自分の立場を明確にすることの重要性を学んだ。質的研究については、グラウンデッドセオリー、現象学、エスノグラフィー、ディスコース分析などについてのイントロダクション、また、量的研究についてはSPSS演習を交えながらロジスティック回帰分析など多変量解析まで学んだ。週末や休日にはルクセンブルグ、アントワープ、リエージュ、ケルン、ボンなどへ小旅行に出かけ、欧州の文化を楽しんだ。修士論文のテーマは「コミュニケーション技能教育による医学生のempathyの変化」としており、来年春までに首尾よく論文提出を終え、修了式を迎えたい。



▲ ダニエル先生宅でのホームパーティにて

ラオス保健省高官への 講義

講師 大西 弘高

2015年5月14日、国立国際医療研究センターにて、ラオス保健省高官への講義を行った。これは、ラオス人民民主共和国（以下ラオス）で展開されている「JICA 母子保健人材開発プロジェクト」の国別研修が5月11日より1週間の日程で行われていたものに関連し、医師の国家試験についての講義依頼があったことによる。ラオス側研修参加者は、保健省副大臣、保健省ヘルスケア局局長と副局長、保健省研修研究局副局長と保健医療専門職課職員の計5名であったが、副大臣とあと2名は以前プロジェクトで日常的に顔を合わせていた面々であり、なごやかな雰囲気での議論が進んでいった。

主な内容としては、カリキュラム開発とアウトカム基盤型教育、国家試験と大学医学部における卒業時評価の棲み分け、学習者評価の質保証システム、日本の医師国家試験出題基準といった流れで話した。ラオスでは、大学医学部が現在も保健科学大学一校しかなく、その運営も保健省が強く関与しているため、どのように保健科学大学に権限委譲するのが難しい課題である。今回の講義によって、ラオスでの今後の医学教育の方針が分かりやすくなったとの感想が聞かれた。



▲ ラオス保健省の方々と

東京大学医学部教育総合的改革 FD（第 1 回）

講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝

2015 年 7 月 7 日（火）に今年度第 1 回となる東京大学医学部教育総合的改革 FD を実施し、約 30 名の教員が参加した。今年度の FD はあと 2 ～ 3 回の実施を予定している。昨年度、医学教育分野別認証評価事業と関連して開催した FD は 5 回にのぼり、その結果さまざまな具体的改革へとつなげることができた。今回の FD では「本学医学部の教育理念・アウトカムから考える国家試験対応について」をテーマに、本学においていかに国家試験に対応していくべきか議論した。最初に江頭正人准教授（附属病院教育・研修部）より「最近の卒業生を対象にした医師国家試験不合格者の分析」、次に北村教授より「医師国家試験のあり方と今後の動向」という話をしていただき、その後、参加者でグループ討議を行った。結果として、M1（3 年生）からの早い対応、チューター制度の有効活用、学生同士でのフォローアップ、学生に定期的に危機感を持たせるための機会やデータを提供するといったことが必要という話し合いになった。今後、具体的改革につなげるべく、教務委員会等で結果を検討する予定としている。

10 月 14 日（水）には、チューターの先生方や関心のある教員を対象とした「チューターとしての学生支援についての FD」を開催予定としている。



▲ 北村教授による講演



▲ グループ討議の様子

東京大学医学教育基礎コース 2015

博士課程大学院生 山本 健・講師 孫 大輔

医学教育基礎コースは 2011 年度に本学医学部の FD の一環として始まった。主に医学部教員や附属病院の教育担当スタッフを対象に、実践的な教育法について学べるコースを開催してきた。2015 年度からは、新しく着任した指導者を主な対象とした FD として再度位置づけることとし、新しく学生・大学院生ならびに研修医の教育にあたる教員・病院指導医などに受講を強くすすめることとした。電子媒体や紙ポスターなどによる学内での広報活動も積極的に行った。また、2015 年度以降の学内受講者は、2 年間で全 8 回のうち 6 回以上受講された方に修了証を発行する予定である。

2015 年度は全 8 回のセッションを予定し、一通り受講することで教育理論の基礎から効果的な教育実践法、応用的なテーマまで学べるようになっていく。例えば、第 1 回の「医学教育ははじめの一步：東大医学部の教育の現状より」では、前半に北村教授から本学の教育理念と教育アウトカム、全国の卒前教育の流れ（PBL、共用試験、白衣授与式、参加型臨床実習など）、医師国家試験や臨床研修制度の変遷、新専門医制度、理想の医師像などについてレクチャーが行われた。後半では大西講師から本学の SWOT 分析を行うワークや分野別認証評価、アウトカム基盤型教育などについてレクチャーが行われた。第 2 回「インストラクショナル・デザイン」では、孫講師から学習の目標・評価・方略の一体化や、学習の意欲をデザインする ARCS モデルなど授業設計の基本についてレクチャーとワークが行われた。第 3 回以

後も「魅力あるレクチャーの方法」「多職種連携教育」「プロフェッショナルイズムの教育」「臨床推論の教育」などが予定されている。

2014 年度までは毎回 15 名前後の参加だったが、2015 年度は第 1・2 回ともに 30 名程度の申し込みがあった。第 1 回は学内からの参加が多く、第 2 回はやや学外からの参加が多かった。医学部の教員だけでなく、附属病院の教育担当者など多職種が参加している。テーマに関心のある方、新たに教育担当になった方などの積極的な参加をお待ちしている。なお、学外への広報は定員に余裕がある場合のみ追加で行っている。

学内の方の参加費は無料（学外の方は 1000 円）、医学部総合中央館（医学図書館）3 階 333 教室（2015 年度から規模を拡大し場所を変更して行っている）で主に 18:00 ～ 19:30 で開催している。問合せは、ircme-bc@m.u-tokyo.ac.jp（担当：山本、孫）まで。



▲ 第 1 回基礎コースの様子

東京大学医学教育セミナー 2015 年春・夏の実績

講師 大西 弘高

東京大学医学教育セミナーは、順調に回数を重ねているが、徐々に参加者も増え、広く評価されている印象がある。第76回は、今年3月に大学院を卒業した春田淳志医師が博士課程で取り組んできたTPEに関して話した。地域住民や様々な医療系職種も巻き込んだ医師養成は、地域社会にとって今後重要な視点になっていくと思われた。

メアリー・リー先生は、今年2月に実施した認証評価に関して、振り返りや東大医学部にとっての今後の課題について話された。次回の認証評価までにどのような改革が必要となるかが明確に示されており、当センターにとっても針路が開かれた感じがした。

大西弘高講師は、認証評価やアウトカム基盤型教育に合わせた学習者評価システムについて話した。大学医学部にとっては、卒業時評価によって卒業生の質管理が必要だが、評価制度自体の質管理の方向性についても明示した内容となった。

神原哲也先生は、ペナ／ルーベルによる現象学的人間観に基づいた看護ケアについて話された。人間は身体化された知性を持ち、背景の意味の中で育ち、人や物事を気遣う(care)存在として状況や時間軸の中に存在しており、患者をそのような人間として捉えることの重要性が示された。

北村聖教授は、足かけ8年で全国50カ所の地域医療現場を実際に訪れての振り返りについて講演した。今後、医学教育においてますます重要となる地域基盤型教育の方向性についてもまとめた。

中山法子先生は、ナースプラクティショナー(NP)養成分野の大学院修



▲ 第81回セミナーの中山先生

士課程を修了し、第一線の現場で働く様子を含めて話された。諸外国でのNPの現状、わが国で看護師の特定行為が今後どのように展開されるかといった点についても、非常に具体的に触れていただいた。

これらの内容については、<http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp/event/seminar>にて概要、当日資料、一部はYoutubeでの講演内容動画配信もしているため、是非ご利用いただきたい。

○第76回 3月19日(木) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：春田淳志(東京大学大学院医学系研究科
医学教育国際研究センター博士課程修了生)

テーマ：「専門職連携教育(Interprofessional education:IPE)の現状と
地域住民を交えたトランスプロフェッショナルエデュケーション
(職種を超えた連携教育:TPE)の事例研究」

○第77回 3月27日(金) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：メアリー・リー(東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター
特任教授・米国タフツ大学元副学長・医学部 教授)

テーマ：「東京大学医学部分野別認証評価・初の試みを振り返って」

○第78回 4月14日(火) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：大西弘高(東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 講師)
テーマ：「医学部での学習者評価はどうあるべきか：
アウトカム基盤型教育の時代における新たな全体設計の提案」

○第79回 5月14日(木) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：神原 哲也 先生(東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻
哲学専門分野 死生学・応用倫理センター兼任教授)

テーマ：「患者をトータルに見るということー〈ケアの現象学〉の立場から」

○第80回 6月11日(木) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：北村 聖(東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 教授)
テーマ：「地域医療はおもしろい」

○第81回 7月15日(水) 18:00～19:30 医学図書館3F333 会議室

講演者：中山法子 先生(公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院/
朝比奈クリニック 糖尿病看護認定看護師)

テーマ：「看護師の役割拡大に関する国内の動向
ーナースプラクティショナー養成分野修了後の活動からー」

臨床診断学実習・模擬患者つつじの会

講師 孫 大輔・特任専門職員 澤山 芳枝

今年度も医療面接実習を中心とする臨床診断学実習を実施している。学生各班は前期と後期で2回の実習を経験する。前期は附属病院教育・研修部の江頭正人准教授と孫がチューターを担当し、後半は各診療科の担任教員が担当する。実習前に総論授業として症候学・臨床推論と身体診察を4～5月に3回実施した。症候学・臨床推論では診断の流れについて学んだあとに症例ベースでグループごとに鑑別診断を考えてみる形式で行った。基本的な「胸痛」「腹痛」「めまい」を扱った。身体診察では班ごとに分かれてOSCEレベルのバイタルサイン測定、胸部診察を扱った。5月11日に実施した「医療面接実習総論」では、孫が4年生全体に対し講義及び演習を行った。医療面接の基礎、模擬患者とのデモンストレーション、学生同士のロールプレイを行った。医療コミュニケーションの基本(患者のナラティブ、共感など)についても学習してもらった。「模擬患者による医療面接実習」は5月20日～9月16日まで水曜日に7回実施され、「模擬患者つつじの会」会員が参加している。

現在、東京大学と東京医科歯科大学のコンソーシアムで養成を行っている「模擬患者つつじの会」の会員は33名(男性5名、女性28名)である。2015年3月には俳優かつ五代塾長の五代高之氏を外部講師として招いて、ストレッチ、発声練習から始まる本格的なトレーニングを体

験した。「まったく経験したことのない演技指導で、楽しくかつためになった」、「演技の秘訣を見せていただいたことを、今後の私たちの模擬患者の演技に生かしたい」など好評であった。2015年度は、2ヶ月に1回程度、定期勉強会を実施している。プログラムは金子英司准教授(東京医科歯科大学)と孫2人の教員で、それぞれテーマを決めて講義を行い、後半はスキルアップのための演習という構成にしている。講義のテーマは、認知症や高齢者医療など、会員にとって身近に関心を高めるものとしている。演習についても新しい内容やシナリオを作成し、スキルアップを図っている。8月25日の勉強会では「暮らしの保健室」等で著名な看護師の秋山正子氏を外部講師として招き「エンディング、看取りについて考える」をテーマに講演して頂いた。また、外部団体からも協力要請を受けるようになり、7月には日本プライマリ・ケア連合学会の専門医試験OSCEのために、模擬患者約10名が協力した。今後も、学内の学生教育を中心に、医学教育に貢献できるような活動を続けていく所存である。



▲ 「模擬患者つつじの会」の皆さんと

医学系研究科での開講状況について

講師 大西 弘高

医学教育国際研究センターは、2013年度より医学系研究科内の組織となり、医学教育学部門と医学教育国際協力学部門の2つがそれぞれ内科学専攻、国際保健学専攻（School of International Health: SIH）の協力講座として機能し始めた。2015年度からは、新たに公共健康医学専攻（The School of Public Health: SPH）の行動社会医学講座、保健医療人材育成学分野としても3名の教員が兼任することとなった。本稿では、これらの開講状況についてまとめた。

SPHでは、2015年度からの新しい学事暦によるS1ターム（春、springの4～5月）において、保健医療人材育成学を開講した。火曜1・2時限（8:30～10:15、10:25～12:10）で4月7日～5月26日の7日間という短い期間ではあったが、カリキュラム開発を中心に、濃密な内容になった。14人が履修し、さらに多いときは5名ほどが聴講するなど、新しい講義への関心が高かった。写真は、最終評価の一部として行われたプロジェクトの発表風景だが、皆さんが緊張感を持って取り組まれたと感じている。秋にもSPHにおいて学習者評価学をA2ターム（11

～12月）に開講予定であり、医学教育、医療者教育分野における学習者評価やその質管理を学問的にまとめていく試金石にしたい。

SIHにおいても、S1タームに医学教育国際協力学特論Ⅰを開講した。こちらは昨年度9名、今年度7名が履修している。内容的にはSPHと似通った部分もあるが、国際協力の文脈で講義が展開されること、ディスカッションは全て途上国での人材育成プロジェクトを想定して行うこと、そして講義もディスカッションも全て英語で行われることが大きな違いとなる。今回も、ミャンマー人1名、日本人だが帰国子女で英語に非常に堪能な学生1名がおり、学生間のダイナミクスが上手く働いたと感じている。SIHにおいては、A1ターム（9～10月）に医学教育国際協力学特論Ⅱをさらに開講予定であり、プロジェクト評価、教育や心理関連のデータのまとめ方について触れていきたい。



▲ SPH プロジェクト発表風景

保健医療人材育成学カリキュラム

4月7日 学習理論とカリキュラムのニーズ評価
4月14日 カリキュラム開発：学習目標・学習方略
4月21日 カリキュラム開発：学習者評価概論
4月28日 アウトカム基盤型学習とインストラクショナル・デザイン
5月12日 プロジェクト・サイクル・マネジメントとプログラム評価
5月19日 講義技法、プロジェクト発表準備
5月26日 プロジェクト発表

Curriculum for International Cooperation for Medical Education I

4/8 Lecture: Needs assessment, Principles for curriculum development
4/15 Lecture: Methodology of curriculum development, Strategies for education and learning
4/22 Lecture: Learners' assessment: principles & specific tools
5/13 Lecture: Curriculum evaluation, project management
5/20 Project Work: Setting the theme, discussion 1
5/27 Project Work: Discussion 2
6/3 Project presentation

駒場での初年次ゼミナール

教授 北村 聖・講師 孫 大輔

2015年度より始まった初年次ゼミナールは、教養学部1年の全学生を対象として、1クラス20名程度の規模で行うチュートリアル形式の授業である。その目的は、東京大学に入学したばかりの1年生のマインドをリセットし、これまでの受動的な知識を授かる形での学びの意識を改革することで、大学において自発的に学ぶ姿勢を涵養することにある。当センターからは、北村教授による「医学の知：医療者を志す者が考えるべきこと」、および孫講師による「コミュニティの健康と医療を考えよう」を開講し、それぞれ14名、13名の理系学生が受講した。

北村の授業では14名の男子1年生を担当した。全13回のうち、最初の2回は全体講義でオリエンテーションとあまり役に立たない文献検索法の解説で終わった。第3回以降は、理科系学生に読んで欲しい本を指定し、毎週読んできた上でいろいろなディスカッションをした。最初は『福翁自伝』。簡単な感想を述べたあと、リーダーとはどのようなものかを3班に分かれて議論してもらった。同時に「フォローアップ」についても考え、その違いを議論した。その後、『夜と霧』を読んだ上で、科学者の信念とは何かを議論した。為政者の権力に流されることもあるかもしれないという意見もあった。渡辺淳一『光と影』では、医師の決断が患者の人生を大きく変えることを感じてもらった。移植ネットワークの軋旋誤りの事例を紹介し、現代においても少しの違いが大変なことを引き起こすことをわかってもらった。その他、『死の瞬間』や『優れた意志決定』『東京大学公開講座67 東京大学』など

を読んで、いろいろな議論をした。東大生が考える東大生の強みと弱みが教員にとって最高に面白かった。（北村）

孫の授業では、人の集合体である地域・コミュニティが、人の健康にどのように影響を及ぼすのかをさまざまな角度から考えさせる授業を行った。前半では、ソーシャル・キャピタルと高齢者の健康の関連を分析した論文（和文）を読み、論文の基本的構造と読み方、そして、その結果と考察を学会発表形式でプレゼンテーションをさせる内容とした。学生は当初、論文の内容を理解することに困難を感じていたが、構造を理解することで読みやすくなることを学んだ。後半は、実際に千葉県C市のデータ（既存資料・調査報告書）を与え、模擬インタビュー（実際にC市の保健師に来てもらった）や模擬フィールドワーク（Google ストリートビューを利用）を通して、地域の健康課題を分析する地域診断（Community Diagnosis）に取り組んだ。また希望者のみで土曜日にフィールドワーク体験を谷根千（谷中・根津・千駄木）エリアで実施した。（孫）



▲ フィールドワークの様子

新外国人特任教員 Dr. Srinivasan の紹介

10月16日付で来年3月末まで特任准教授として招聘するマラティ・スリニバサン先生の紹介文です。

カリフォルニア大学デービス校医学部准教授 Malathi Srinivasan, MD, FACP

Dr. Srinivasan is a Master Clinical Educator, Professor of Clinical Medicine and Director of Practice Based Learning and Improvement at the University of California, Davis School of Medicine. She is the Senior Associate Editor and Editorial Fellowship Director for the Journal of General Internal Medicine, and former President of the California-Hawaii Society of General Internal Medicine. She was an RWJ Foundation Generalist Physician Faculty Scholar, US Health and Human Service Public Policy Fellow. She has been awarded the California SGIM Educator of the Year Award, and was recognized by her university with the 2014 Dean's Award for Excellence in Education. She is currently co-Director of the OneHealth Teaching Scholars Faculty Development Program, an international program focusing on core competencies for health professions educators.



As a PI or Co-PI, Dr. Srinivasan has been awarded over \$8million in NIH and CDC funding. Her research has focused on improving physician competency around clinical decision-making, through technology-aided education and reflective practice. From an educational perspective, she has expertise in educational research, clinical simulation, physical diagnosis, diagnostic reasoning, curriculum development and assessment. In addition to working on her Masters in health professions education at the MGH Institute in Boston, she has been a consultant and advisor to health technology start-ups in Silicon Valley.

Dr. Srinivasan has served on the Community Boards of the PBS Station KVIE and the Sacramento Philharmonic. She is currently one of 11 Arts Commissioners for the Sacramento Metropolitan Arts Commission, a publically appointed position. She was born in Canada, raised in Chicago, from a South Indian family. She trained at Northwestern University for medical school, University of Iowa for residency, and the Regenstrief Institute for her NRSA research fellowship.

外国人特任教員の選考に際し、米国財団法人野口医学研究所にご支援を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

日本医学教育学会大会出席報告

講師 大西 弘高・講師 孫 大輔

さる7月24日、25日に新潟で開催された第47回日本医学教育学会大会に参加した。

孫は筆頭演者として「インストラクショナルデザインを用いたIPEファシリテーションプログラムの開発と評価」という口演発表を行った。内容は、JSISH（日本医療教授システム学会）のプロジェクトチームで開発を進めた多職種連携教育（IPE）ファシリテーションプログラムについてであり、その妥当性と受容性、学習効果などについて発表した。また、南大東診療所の太田龍一先生による「沖縄の離島で初期研修医は何を学んでいるか？—南大東診療所における地域医療研修を通して」という口演発表の共同演者として、筆頭演者の太田先生が欠席となったため代理で発表を行った。内容は、初期研修医7名を対象としてインタビューを行い、離島医療における学びをSCATによって質的分析を実施したもので、離島ならではの、島民の生活の困難さへの理解や、島民の協働による地域保健の充実などが語られていた。

また、当センター研究生の密山要医師が「初期研修医教育における振り返りファシリテーター養成のための取り組みと課題」と題したポスター発表を行った。初期研修医の振り返りを、医療事務も含むファシリテーターがサポートする際にどのような利点と課題があるかを分析したものであった。（孫）

大西は、医学部のコンピテンシー、医学教育で使えるeラーニングの2つのシンポジウム、共用試験OSCEにおけるIRT利用、家庭医療専門医認定におけるポートフォリオ評価の2つの口演を行った。特に反響が大きかったのは、「欧米の医学教育におけるコンピテン

とは？」と題したシンポジウムでの講演であった。コンピテンス、コンピテンシー、アウトカムの3つの用語を、最新の定義によって整理して説明した。また、新たにDreyfusモデルやEPA（entrustable professional activities）、特にコアEPAと卒前教育、Millerの三角などの関連性についても触れた。これら2つのポイントは、今後アウトカム基盤型／コンピテンシー基盤型医学教育が、新たな医学教育分野別認証評価制度と相俟って、どのような改革をもたらすかを理解しやすくするといった感想が聞かれた。

家庭医療専門医認定におけるポートフォリオ評価は、現在整備が進んでいる総合診療領域の専門医制度の基盤となるものである。家庭医療専門医のあり方、ポートフォリオ評価の意義、心理測定的な解析の重要性といった様々な切り口での反応がみられた。上述したコンピテンシー基盤型教育やEPAの話題とも関連性が高く、他の様々な領域にも応用されていくことが期待される。（大西）



▲ ポスター発表をする密山医師

3 MAR	
4日(～8日)	WONCA アジア太平洋地域学術大会出席 (Lee、大西、孫)
10日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会
17日	平成26年度第10回東京大学医学教育基礎コース 「臨床推論の教育」(大西)
19日	第76回東京大学医学教育セミナー「専門職連携教育(IPE)の現状と地域住民を交えたトランスプロフェッショナルエデュケーション(TPE)の事例研究」(東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター博士課程修了生 春田淳志先生)
24日	認証評価から考える医学部教育総合的改革FD (第5回) 「模擬患者つつじの会」定期勉強会(補講)
27日	第77回東京大学医学教育セミナー「東京大学医学部分野別認証評価・初の試みを振り返って」 (Mary Lee 特任教授)
4 APR	
7日(～5月26日)	公共健康医学専攻保健医療人材育成学講義 (北村・大西/全7回)
8日(～6月3日)	国際保健学専攻医学教育国際協力学特論I講義 (大西/全7回)
10日	医学科・健康総合科学科合同授業「多職種連携」
13日(～27日)	臨床診断学実習(症候・身体診察)(全3回)
7日(～7月14日)	平成27年度教養学部・初年次ゼミナール (北村・孫/全13回)
14日	第78回東京大学医学教育セミナー 「医学部での学習者評価はどうあるべきか：アウトカム基盤型教育の時代における新たな全体設計の提案」(大西弘高講師)
21日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会
5 MAY	
11日	臨床診断学実習 (模擬患者による医療面接実習総論)
14日	JICA「ラオス国家試験免許制度及び看護教育の質保証」研修での講義(大西)

14日	第79回東京大学医学教育セミナー 「患者をトータルに見るということー〈ケアの現象学〉の立場から」(東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻・哲学専門分野 教授 榎原哲也先生)
27日	平成27年度第1回東京大学医学教育基礎コース 「医学教育ははじめの一步ー東京大学医学部の教育の現状より」(北村・大西)
30日(～6月4日)	ポーランド・ボズナン大学訪問(北村)
6 JUN	
3日(～9月16日)	臨床診断学実習(第1ターム医療面接実習)(全7回)
11日	第80回東京大学医学教育セミナー 「地域医療はおもしろい」 (北村聖教授)
16日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会
29日(～7月3日)	米国・トーマス・ジェファーソン大学訪問(北村)
7 JUL	
7日	平成27年度第1回東京大学医学部教育総合的改革FD
9日	平成27年度第1回運営委員会
15日	第81回東京大学医学教育セミナー 「看護師の役割拡大に関する国内の動向ーナースプラクティショナー養成分野修了後の活動からー」 (公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院／朝比奈クリニック 糖尿病看護認定看護師 中山法子先生)
21日	平成27年度第2回東京大学医学教育基礎コース 「インストラクショナル・デザイン」(孫)
24・25日	第47回日本医学教育学会大会出席 (北村・大西・孫・密山)
8 AUG	
3日	三重・高田高等学校1年生来訪
23日(～27日)	APAME アジア太平洋医学雑誌編集者会議 2015出席(北村)
25日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会

編集後記

お蔭様でセンターニュース No.28 の発行に至りました。ご協力を頂いた関係者の皆様に深く御礼申し上げます。さて、今年の夏、東京では連日 35 度を超える猛暑が続きました。気温だけを見比べると、はるか南の沖縄のほうが涼しいのではと感じる日も少なくありませんでした。うだるような暑さの中、5 年後の真夏に開かれる東京オリンピックのことを案じる声をちらほら耳にしました。とくにマラソンなどの屋外の競技が無事に済むことを今から祈らずにはいられません。季節が巡り、センターニュース No.29 が出される頃には桜が咲き始めていることでしょう。次号でも多岐にわたる活動をご紹介できるよう、一同精進してまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。(み)

発行元

発行 2015 年 9 月 25 日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
 医学部総合中央館 2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ